

山梨県立 考古博物館だより NO. 85

<http://www.pref.yamanashi.jp/kouko>



アンデスの黄金♪

開館 35 周年記念特別展

ANCIENT CIVILIZATION OF THE

ANDES

2018 5/19 土 → 7/16 月 祝

アンデスって、
なんですか？



初公開！巨大彩色土器！



時を越した少女ミラちゃん！

古代アンデス文明展

上部左から《擬人化したネコ科動物・レプリカ》モチェ文化（紀元 200 年～ 750/800 年頃）在日ペルー共和国大使館所蔵 / 《細かい細工がほどこされた金の装飾品》後期シカン文化（紀元 800 年～ 1375 年頃）ペルー文科省・国立ブリュニング考古学博物館所蔵
《象嵌のマスク》モチェ文化（紀元 200 年～ 750/800 年頃）ペルー文化省・国立博物館所蔵 / 《土製のリヤマ像》フリ文化（紀元 650 年～ 1000 年頃）ペルー文化省・国立考古学人類学歴史学博物館所蔵
下部左から《杖を持つ神が描かれた多彩色壺》フリ文化（紀元 650 年～ 1000 年頃）ペルー文科省・アヤクチョ地方歴史博物館所蔵 / 《つづね編のチュニック》フリ文化（紀元 650 ～ 1000 年頃）ペルー文化省・国立考古学人類学歴史学博物館所蔵
《少女のミラとその副葬品》チリバヤ文化（紀元 900 ～ 1440 年頃）ペルー文化省・ミラ研究所・チリバヤ博物館所蔵

古代 アンデス 文明展

南米大陸というと、みなさんはどのようなイメージを思いかけますか？地球儀で見るとちょうど日本の裏側に位置するそこは、わたしたちにとってどこか遠く、謎に満ちた世界に思えるかもしれません。しかしこの大陸——特に、南米大陸の西岸に連なるアンデス山脈に沿って広がる雄大な大地では、およそ1万5000年もの昔から、世界でもほかに類を見ないほどに多様な文明が生まれ、滅びていったという歴史があり、その神秘とロマンあふれる遺跡や発掘品の数々は、今なお私たちの心を惹きつけてやみません。南北4000km、標高差4500mにもおよぶ壮大なスケールの大地を舞台に興亡を繰り返した、カラル・チャビン・ナスカ・モチェ・ティワナク・フリ・シカン・チムー・インカとよばれる9つのユニークな文化。本展では、これらアンデスを代表する文化が誇る、宗教儀礼、芸術、生活様式といった独自の世界観を、厳選した貴重な品々とともに紹介します。

マチュピチュ（ペルー）

2018
5/19 [土] → 7/16 [月祝]

古代アンデス文明展 展示構成

序章 アンデスへの人類到達

【紀元前1万3000年～前3000年頃】

アンデス原産であるトマトやトウガラシ、ジャガイモなどの作物は世界の料理を変えたと言われています。アンデス特有の環境に、いつ、どのようにして人類は到達したのでしょうか。序章では、アンデスに人が定住するまでの長く、複雑な過程を最新科学から辿りつつ、アンデス地域のさまざまな環境を紹介します。



第1章 アンデスの神殿と宗教の始まり

カラル文化【紀元前3000年頃～前2000年頃】

ペルーの首都リマから北に200kmほど離れた場所にある、世界遺産「カラル遺跡」。砂漠地帯であるカラルでは定住生活が始まった痕跡が見つかっており、祭祀センターが造られた地域組織が存在していたと見られます。カラル遺跡は、本当にアンデス文明の起源なのでしょうか？第1章では、アンデスでどのような神殿がいつ建造され、どのような宗教を持っていたのかを紹介します。



第2章 複雑な社会の始まり

チャビン文化【紀元前1300年～前500年頃】

数々の石造りの壮大な建造物で知られる古代アンデス文明。石の文明の始まりはどの時代からだったのでしょうか。ペルー北部山岳地帯のチャビン文化では、石彫の神像や頭像などが見られ、その片鱗をみることができます。また、この時代は地域ごとに独特な宗教観が芽生え、社会の統一が始まっていきました。第2章では、広範囲に影響を及ぼしたチャビン文化の宗教観や図像、そして社会構造を紹介します。



画像上から：《アンデスのトゥモロコシ》/《カラル遺跡》/《差し込み用の突起付き石の頭》チャビン文化 ペルー文科省・国立チャビン博物館所蔵

第3章 さまざまな地方文化の始まり

ナスカ文化【紀元前200年頃～紀元650年頃】

モチェ文化【紀元200年頃～750/800年頃】



アンデス文明は文字を持たなかったため、土器の意匠が意思疎通のツールとなっていたといわれています。モチェ文化では、土器を通して人々が共有していた「神々」「死者」「自然」「人間」の4つの世界観を紹介します。また、地上絵で知られているナスカ文化では、社会構造が変化するほどの急激な環境変化を経験したことがわかっています。この章では、モチェ文化とナスカ文化、同時代の異なる地域でどのような文化が華ひらいたのかを探ります。

画像左から：《リヤマが描かれた土器》ナスカ文化 ディダクティコ・アントニーニ博物館所蔵 / 《アシカをかたどったあぶみ型単注口土器》モチェ文化 ラルコ博物館所蔵 / 《ナスカの地上絵・ハチドリ》

第4章 地域を超えた政治システムの始まり

ティワナク文化【紀元500年頃～1100年頃】

フリ文化【紀元650年頃～1000年頃】

シカン文化【紀元800年頃～1375年】



「太陽の門」をはじめとするティワナク文化の高度な石造建築技術や、同じ高地で共存していたフリ文化の時代から築かれ始めたインカ道（道路網）。そして、現在のペルーのシンボルにもなっている黄金の装飾品を生み出したシカン文化の金属加工技術。アンデスの各地が生み出した政治、経済、文化の体系は、後にアンデス最大にして最後の帝国となるインカ帝国に受け継がれていきました。第4章では、インカ帝国の基礎となった重要な文化を紹介합니다。

画像左から：《トルコ石の象嵌された黄金の頭飾り》ティワナク文化 先コロンブス期黄金博物館所蔵 / 《インカ道》ペルー

第5章 最後の帝国——チムー王国とインカ帝国

チムー王国【紀元1100年頃～1470年頃】

インカ帝国【紀元15世紀早期～1572年頃】

文字を持たなかったアンデスの人々の思想や宗教観などの変遷は、長い年月をかけて発展してきた黄金や石像、土器、織物など、それぞれの文化の持つ特有のデザインを通して知ることができます。第5章では、アンデス文明の最後を飾った、チムー王国とインカ帝国という二つの勢力の覇権争いを描きます。そして、アンデス地域に南北4000キロにもおよぶ大帝国を築きながら、わずか168名のスペイン人の侵略によってあっけなく崩壊したインカ帝国の実像を紹介します。



画像：《インカ帝国のチャチャボヤス地方で使われたキーフ》インカ文化 ペルー文科省・ミイラ研究所・レイメバンバ博物館所蔵

第6章 身体から見たアンデス文明

人の身体も文化の所産です。身体に描かれたさまざまな意匠には、その文化の持つ特質が表れています。古代アンデス文明には、旧大陸には見られないミイラの文化が育ちました。インカの王は死後ミイラとなり、家臣にかしずかれながら生活していました。にわかには理解できないこの風習も、その起源や発展の様子を眺めると、人間の本質が見えてきます。この章では、身体に表れたさまざまな加工の跡を概観し、アンデスの生老病死について考えます。



画像：《頭蓋穿孔された頭》チリバヤ文化（紀元900年頃～1440年頃） ペルー文科省・ミイラ研究所・チリバヤ博物館所蔵

特別展記念講演会

6月10日(日) 13:30～15:00 定員：100名

◆「アンデスのミイラ—その誕生から消滅まで—」

篠田 謙一 氏

(国立科学博物館副館長 兼 人類研究部長)

◆「インカ帝国はなぜ滅びたか」

網野 徹哉 氏

(東京大学大学院総合文化研究科 教授)

会場 風土記の丘研修センター講堂

※参加費は無料ですが事前予約が必要です。5月10日(木)から電話(055-266-3881)またはホームページの電子申請にてお申し込みください。

もふもふ

アルパカ記念撮影会

5月26日(土)・7月8日(日)

11:00～14:00 [12:00～13:00は中休み]

アンデスの申し子!?

もふもふカワイイ

アルパカが登場!

一緒に写真を撮って

癒やされませんか?



※ふれあいにはチケットの半券が必要です。
※荒天時は中止になる場合があります。

チケット情報

【観覧料】

一般・大学生 1,080円 (860円)

高校生以下・県内在住の65歳以上無料

※()内は20名以上の団体料金

※障害者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名無料

【前売り券】

一般・大学生 860円

【前売り券販売場所】

ローソンチケット、セブンチケット、チケットぴあ、イープラス

山梨県立考古博物館、テレビ山梨事業部 [055-232-1118]、ほか

4月1日(日)～5月18日(金)まで販売。

@yamanashi_kouko @yamanashi.kouko1103

《例またはフェイスベントをした小像》
クリスチーナ文化 (紀元前1200～800年頃)
リマ美術館所蔵



撮影：義井豊